

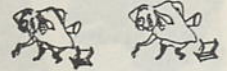


## スーパー・サクソ・プレイズ・バード

(1)ココ (2)ジャスト・フレンズ (3)パーカーズ・ムード (4)ムーズ・ザ・ムーチェ (5)スター・アイズ / (6)ビー・バップ (7)リピティッション (8)チュニジアの夜 (9)オー・レディ・ビー・グッド (10)ホット・ハウス

メッド・フローリー, ジョー・ロベス (as) ウォーン・マーシュ, ジェイ・ミグリオリ (ts) ジャック・ニミツ (bs) ロンネル・ブライト (p) パディ・クラーク (b) ジェイク・ハナ (ds) コンテ・カンドリ (tp) (2)(4)(7)ではプラス・セクション加わる

牧 内田



東芝 (キャピトル)

ECP-88118 ⑤¥2,000 8月新譜

これは大変なレコードである。世の中には「猫に小判」とか「豚に真珠」とかいう諺があるが、これを評価するの難しいのがアナタを猫にも豚にもする。ただしこれを評価できる人は数多くはあるまい。少なくともサクソという楽器を手に持ち、サクソ・セッション・ワークを体験した人であったらここになし遂げられた業績がいかに高価なるものであるかがわかるはずだ。フリーとか前衛とかいって一本のサクソを気の向くままに吹いていたような人にはサキソストであってもこのLPの良さはわからない——つまり彼は「猫」でありこのLPは「小判」だということだ。

ともあれ、これはチャーリー・パーカーが吹いたインプロヴィゼーション・フレーズが素材である。そのフレーズを5本のサクソ・セクションがハーモニーをつけて合奏するといったところが狙いである。例えば<ココ>のテーマは、バードが同曲を45年に吹込んだオリジナル・レコーディングのソロであり、<レディ・ビー・グッド>は46年にロスでのJATPレコーディングのソロであるのだ。このアイデアはロスのサキソストである、ジョー・マイニとメッド・フローリーの2人によって抱かれた。そしてアレンジはフローリーによって4曲、ベースを弾いているパディ・クラークによって6曲書かれた。パーカーの早いアドリブ・フレーズを一糸乱れることなくハーモニー・ソリのできるサキソストはザラにはいない。

フローリーは西海岸在住のすぐれたテクニシャン5名を選び、練習に練習を重ね、公演まで実に11ヶ月をリハーサルに費してこのスーパー・サクソは生れた。全篇がサクソ・ソリのみごとな驚くべきテクニックの展示会であり、バックしているジェイク・ハナ、ロン・ブライトなどを中心としたリズムもすばらしい。このサクソ・ソリのみでものをいおうというアイデアは新しいものでなく、すでにケントンの<オーパス・デ・パステル>がその一例であり、それと色どりに1本のトランペットを加えたジーン・ローランドのグループがそのままハーマンに引き抜かれて「フォー・ブラザーズ」になった例もある。しかし素材にバードの有名なソロを用いたというところに新機軸がある。ここでも色どりにコンテ・カンドリのペットが用いられているがこれまた色どり以上に立派なものである。(牧 芳雄)

高価な、パーカーの「オン・ダイアル」がマンスリー・トップ・チャートに記載される程の売行きを見せているのは心強いが、海の向うでも、この傾向は同じと見えて「スーパー・サクソ」と名乗るグループも、大変な評判だという。今さらご説明するまでもなく、パーカーに心酔する5人のサクソ奏者を中心とする、このものすごい名前の集りは「プレイズ・バード」と称する如く、全編バップの曲を演ずる他、パーカーのアドリブ部分は、フレーズをそっくりコピーして、サクソ・ユニゾンでやっしまおうという嬉しい仲間達だ。なかにはトリストアーノ派のウォーン・マーシュまで入っているから驚きだ。もっともこの種の企ては彼らの専売というわけではない。昨年発売されたアルトのハル・マクジックの「クロス・セクション」ではジョージ・ハンディの巧みなアレンジで<ナウ・ザ・タイム>が演じられていたが、これは、古く58年の吹込みで、やはりパーカーのアドリブをみごとにサクソ群で再現して喜ばせてくれたものだ。一方ボーカルでは先駆者エディ・ジェファーソン(代表作にジェームス・ムーディと組んで、このLPにも含まれているJATPでの<レディ・ビー・グッド>のソロを完璧にヴォーカライズしたものが挙げられよう)をはじめとして、キング・プレジャー、近くはLH&Rらは同じ試みで成功している。私達にとって誇らしいのは宮間利之とニューハードが前田憲男のペンを持って、6ヶ月以上前からリハーサルを重ねて先月発表にこぎつけた「バップ/アップ・トゥ・デイト」があり、それよりも遙か以前、同じニューハードが「モダン・ジャズ10人集」というLPで挑戦した<ブルー・バード>は、高見弘の好編曲と相まって、高く評価されるものだった。

いずれにせよこうした試みでは、編曲者の腕が鍵を握るが、さすがにスーパー・サクソは、週1回この目的で集まるリハーサル・バンドだけに一段と徹底しており、その上単なるアドリブの模写に終わっていない新鮮な響きがある。もちろん創造性とか将来性という点ではレパートリー上の問題はあろうが、いらぬ心配は無用であろう。このLPに関しての唯一の不満らしきものを挙げれば、ユニゾンばかりでサクソ奏者自身のソロがない点だ。(内田 修)

●録音採点:★★★★(藤井)